

<全体分析>

試験時間 105 分

解答形式
記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

大問 I から III の本文の語数は、昨年は 2,271 words、今年は 2,066 words で 205 words 減少した。

出題の特徴

・読解総合 2 題、その他 (対話文) 1 題、英作文 1 題の構成は昨年と同じ。

その他トピックス (入試改革の方向性を踏まえた目新しい出題など)

- ・大問 I の読解総合問題で、本文の内容に関して 40 words 以内で意見を述べる自由英作文が出題された。大問 III の 7 と大問 IV と合わせて、自由英作文の出題が 3 問になった。
- ・大問 III の自由英作文の制限語数は、昨年の 10~15 words から 25~40 words に増加した。大問 IV の自由英作文の制限語数は昨年同様 80~100 words であった。
- ・大問 II の読解総合問題で、本文の最後に続くトピックを選択する問題が出題された。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	読解総合	「デジタル技術は人と人とのつながりをどう変えたか」 (本文: 862 words) (設問: 42 words)	語数は昨年の 864 words とほぼ同じであった。設問数は 1 問減って 6 問となったが、昨年とは設問の内容が大きく変わった。内容説明問題が 4 問から 1 問へと減り、昨年は出題されなかった英文和訳問題が 1 問出題され、これまで出題されていなかった本文内容に関する意見表明型の自由英作文が出題された。個別に見ていくと、1. の前置詞を補充する問題は標準的であった。2. は前後の内容のつながりから選ぶ問題で、文脈の把握が重要であった。3. は空所の直後の内容をまとめる問題で、the transient nature of the environment や more comfortable in engaging in conversation の意味を分かりやすく書く必要があった。4. は比較的単純な構造の英文であるが、as a result of の後に並列されている 3 つの要素をうまく訳すことがポイント。5. の空所補充問題も文脈の把握が重要であった。6. の自由英作文は本文中に出てくる「仮説 1」と「仮説 2」のどちらを支持するかを述べる問題で、どちらを支持するのかを明示するのはもちろん、その理由を少なくとも 1 つ、「40 語以内」という短い語数の中で端的に示すことが肝要であった。 1. 空所補充 (5ヶ所 選択肢 8個) 2. 適語(句)選択 (2ヶ所 選択肢各 4個) 3. 内容説明 (40字以内) 4. 下線部和訳 5. 空所文補充 (3ヶ所 選択肢 5個) 6. 自由英作文 (40語以内)	標準

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
II	読解総合	<p>「どのように人口が現代世界を形成したか」</p> <p>(本文:609words) (設問:102 words)</p>	<p>《出典》OECD (2019), “How’ s life in the Digital Age?: Opportunities and Risks of the Digital Transformation for People’ s Well-being”, OECD Publishing. (大学発表)</p> <p>人口の変化と現代世界の形成について書かれた英文で、昨年とほぼ同じ語数となっている。2.と3.は内容説明問題であったが、字数指定のない3.については、下線を含む段落全体から必要な内容をまとめるのに苦労した受験生も多かったと思われる。4.はセミコロンで4つの名詞句が並んでいる箇所を和訳するというあまり見られない問題であった。5.は最終段落に続き得るトピックを選択させる問題で、過去には出題されていないタイプの設問であった。6.は内容一致問題で、かなり迷う選択肢も含まれていた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 空所補充 (4ヶ所 選択肢 11 個) 2. 内容説明 (40 字) 3. 内容説明 (字数制限なし。解答欄 4 行) 4. 下線部和訳 5. 後続内容選択 6. 内容一致 <p>《出典》Morland, P. (2019, January). <i>The Human Tide: How Population Shaped the Modern World</i>. John Murray Publishers. (大学発表)</p>	やや難
III	その他 (対話文)	<p>「日本人大学生へのアメリカ留学に関するアドバイス」</p> <p>(本文:595 words) (設問:329 words)</p>	<p>日本の大学生である Yuta に英語の教授である Karen が留学に必要な論文の書き直しに関してアドバイスをしている場面の対話文に、空所補充問題などの設問が施されている。選択問題が中心だが、7.では「留学を成功させるには language ability と positive attitude のどちらがより重要か」について自分の立場を 25~40 words の英語で説明する問題が出題された。back to the drawing board という日本人には耳慣れない表現の言い換えとなる表現を選択する問題が出されたが、それ以外の記号問題は標準的な難度であった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教授が Yuta の留学に関して最も懸念していることを選択する問題(5つの選択肢から1つを選択) 2. アメリカの大学が留学生をどのように選んでいるかに関して教授が示唆していることを選択する問題(5つの選択肢から2つを選択) 	標準

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
IV	英作文	「若者の意識に関する国別の調査結果」 (本文: 75 words)	<p>3. 対話文中の back to the drawing board という表現に最も近い意味のものを選択する問題 (4つの選択肢から1つを選択)</p> <p>4. Yuta のアルバイト経験に関して正しくないものを選択する問題(4つの選択肢から1つを選択)</p> <p>5. 空所補充問題(文中の 5ヶ所の空所に適当な単語を 9つの選択肢から選択)</p> <p>6. 空所補充問題(文中の空所に適当な表現を 4つの選択肢から1つを選択)</p> <p>7. 留学を成功させるには language ability と positive attitude のどちらがより重要か、について自分の立場を 25~40 words の英語で説明する問題</p> <p>フランス, ドイツ, 日本, 韓国, スウェーデン, イギリス, アメリカの 7ヶ国の若者に自分の考え方に関する 5つの質問をした結果をまとめた表が与えられ, 1つまたは2つ以上の結果について述べる問題。そのような結果になった理由を加えながら, 複数の国の比較もしなければならなかったので, やや書きにくい問題だった。制限語数は昨年と同じで 80 words~100 words であった。表がやや煩雑なので, どの項目や数字に注目すればよいかを間違えると良い答案が書けない問題であった。なお, 表に基づいた自由英作文は, 今年で 3年連続の出題となった。</p>	やや難

注: 区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

1. 読解総合問題では、論旨展開の把握を問う問題の出題が続いている。このような問題に対処するためには、論旨展開や文章の構成に留意して読み進める練習が必要である。また内容説明問題に関しては、必要な情報を制限字数内でまとめる力を養成する必要がある。演習には北海道大、東北大、筑波大、大阪大などの長文問題が利用できる。
2. 読解総合問題や対話文読解で出題される意見表明型の自由英作文対策としては、東北大の問題が利用できる。
3. IVの図表の説明を含む自由英作文では、英文を書く前に「図表の中のどのような情報をとりあげどのように全体を構成するのか」をしっかりと考えることが必要である。類題としては、広島大が10年以上に渡って図表の読み取りに関する自由英作文を出しているので、参考にするとよい。